浜松大空襲

佐山　登（前原西・60歳）

序

昭和十九年五月十九日の夕方まで、「敵機侵入」という警戒警報に接し、かつ避難命令を受けて防空壕へ駆け込んだ回数は数十回を重ねていた。そのうちの半分は武山海兵団で残る半分は相模野海軍航空隊で体験した。しかし、いずれの場合も硝煙を見ることも、きな臭いにおいをかぐこともなかった。翌朝尾翼をもぎ取られて煙突のように逆さに突っ立った戦闘機四、五機を滑走路の片隅で目撃して、「昨日の敵機にやられたんだな、迎撃すべき戦闘機がなぜ飛び立たなかったんだろう」と不思議に思ったことが一度だけある。

また浜松海軍経理学校では敵の艦砲射撃を避けて防空壕へ駆け込んだことが数回ある。遠雷のように不気味な響きを防空壕の中で聞いたわけだが、被害があったのかどうかは知らないまま、横須賀海兵団へ配属させられてしまった。

空襲は昼も夜もあった。十五歳の少年兵であった私は、夜の空襲が眠くて眠くて辟易したものだ。焼煙弾雨の中の兵士のことを思ってもなお眠かった。

五月十九日の夜を迎え、立哨の不審番兵を除いた練習生の誰もが床についた。その後間もなく浜松は敵機に襲われた。当時をここに再現してみよう。

なお、浜松海軍経理学校は、浜松商業学校の校舎を借りていた。

練習生は、年齢が十五歳から二十一歳、階級が一等兵から兵長、そして総員が百名ほどだったと記憶している。

十九日の夜の空襲

サイレンがけたたましく鳴った。夜のしじまが破られた。私たち練習生は藁布団と毛布を片付けると、漆黒の闇の中を手探りで防空壕へ走った。

「おい、入り口はここだ。足下に気を付けろ」

先の者が後の者へ声を掛けていく。

「ここだ」

次の者がまた次の者へ伝える。こうして練習生は校庭に深く掘った防空壕の底に降りて落ち着いて、ある者は腰を折って壁にもたれて、またある者は膝頭を抱えて、その上に顔を乗せて、警戒警報の解除を待った。

全く同じ時刻に、大方の市民は貧弱な防空壕の中で、子は親にすがりつき、親は子を膝に乗せて抱きしめ、小さい子どもたちは互いに肩と肩を寄せ合い、暗さと息苦しさに耐えながら、声を潜めて無事を祈り、警戒警報が早く解除されて外へ出られるのを願って待ったはずだ。だが運命は…。

われわれは、練習生としてのみ同僚であるが、階級も年齢も経験もさま

ざまであった。

Hは最古参兵の中の一人であった。その彼が私の耳に囁いた。「今夜は多分焼夷弾で来るだろう」と。

彼の囁いた声は、なぜか不気味だった。そして不吉な予感が横切り相模野航空隊の無残な姿になり果てた戦闘機が脳裏を掠めた。また一方では、彼の心が計り知れないで、一体何を考えているのだろうかと思った。でも「だからどうした」なんて、彼に向かって言う言葉を持っていないから、黙って次を待つしかなかった。

待っていると、彼からではなく別の大声が上の方から降ってきた。

「全員外へ出ろッ」

教官の命令である。

一つの影が、集まった多くの影に向かって怒鳴った。それは絶対服従の命令である。

「いいか、敵機は焼夷弾を頭上にとうかするだろう。それが校舎に当たることだって、火が付くことだって十分に考えられる。しかし燃やしてはならない。お前たちがそれを消すのだ。これから、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下を引き倒すのだ。類焼を防ぐためだ。柱は切れ。屋根には綱を掛けろッ。分かったか。分かったら作業にかかれッ」

夜空は暗い。そして静かである。嵐の前の静かさというものかも知れない。私には、これから何が起きどのように発展していくのか、想像もできなかった。

教官の命令を受けてはじめて、防空壕の中で「焼夷弾であろう」といったH兵長の胸の内を理解することができた。つまり敵機が焼夷弾を投下するのであれば、我々は防空壕の中で無為に時間を過ごすべきではなく這い出て消火すべきである、と彼は言いたかったのに違いないと思ったのである。

校庭の周囲の屋根の稜線が黒い中にも黒く見えだしたのは、目が闇に慣れて順応したからであろう。

こう思いながら渡り廊下に掛かった綱を引き始めた途端、近隣の陸軍の基地から、サーチライトが天に駆け登った。一本二本……五本の探照灯の光芒が敵機を探し始めたのである。

煙突のように突っ立った光の棒が右に左に動く。やがて筋交いに交差する光芒の中にB29が浮んだ。

この瞬間、わが方の高射砲が火をふいて撃ったかどうかは知らない。敵機がとてつもなく大きく見えたのは事実である。

「いまいましい敵機だ」と思った途端、シュウ、シュウ、スル、スル、スル、というような音を引いて、見たこともない物体が落下した。

北側に見える大きい建物を、浜松へ来たばかりの私は、女学校であろうと思って眺めたことが二度、三度ある。もしそうだったら同じ年齢の子たちがいるはずだと思った時もある。その建物の白壁に不明の物体が斜めに当たったらしい。一瞬、物体が光った。光は火である。火はみるみる広がった。

不明な物体は焼夷弾である。無数の束が投下され、それらが空中で分解されて、六、七倍になって降り注ぐらしい。投下された束が千個だとすれば、焼夷弾は六、七千個になるわけである。だから当たらない方が不思議なくらいである。

火の手は、女学校と思われる建物ばかりではなく、いたるところから上がった。庭は急に明るくなった。

平穏だった市街は、風がすでに起き、突風と旋風が火勢を煽って火の海を広げ、阿鼻叫喚の巷に化してしまった。作業を開始してどれほど経過したか分からないが、渡り廊下をやっと倒して校舎を分断することができた。汗は作業服を絞るほど濡らした。やれやれと思っていると、校舎の屋根にも火の手が上がった。

前後左右に落ちる焼夷弾の音に混じって、教官の声が飛んできた。事は命令である。人影は走った。

屋根から梯子の下まで、梯子の下から井戸端まで切れ目なく点線のように並んだ黒い影が、バケツリレーを始めて消火に当たった。

火は棟木の一部を焦がしただけで消えた。

「火は倉庫だ。みんな急げッ」

命令はまた飛んだ。影が動いた。

屋根を下りて地上を走りながら「もし当たったら助からないだろう」と私は思った。そして誰だってこういう怯んだ考えが一度や二度脳裏を掠めたことだってあろうと思った。こう思うと足が重く感じられた。だが結局、怯えたり躊躇したりしてはいられなかった。

梯子から降りて駆けつけると、百坪程度の小さい倉庫の腰板に張り付いて、真っ赤な炎と黒い油煙を吐き出している、柔らかい粘土みたいなものに向かって、先着の黒い影が悪戦苦闘している。と思う間もなく、別の焼夷弾が新しい火の手を三つ四つと作っている。火の手は屋根からも上げ始めた。

腰板に張り付いて燃える奇妙な物質を、これまた奇妙な青竹に荒縄の数本を束ねて括り付けた、まるではたきの親分みたいなもので、擦り落そうと私が突っつくと、その一部が荒縄にくっついて火も移った。荒縄に移った火の固まりを消そうとして靴で踏むと、今度は変てこな物質が靴へ移って火を吐いた。急いで砂に靴を擦ってべとべとの物質を落とすと火は観念して消えた。やっと一。

このように、焼夷弾の火は、消火に手間ひまが掛かって始末が悪い。手に負えない代物である。

思えば、油と生ゴムの混じった敵の最新式の、しかも雨あられと惜しげもなく降り注いでくる焼夷弾に、バケツ、はたきの親分、長い柄の先端に付いた鉤を持って立ち向かうのであるから、勝敗は初めから決まっていたようなものである。

米や味噌、醤油の貯蔵庫であった倉庫は、手も足もでないうちに、ついにと言うよりあっけなく燃え落ちてしまった。敵機は去った。倉庫は焼けたが校舎は残った。そして全員の無事が確認された。

夜が明け、東海の空に棚引く雲が、何もなかったように赤く染まり始めた頃、今朝第一発目の命令が出た。

「付近の道路や焼跡を回って不発焼夷弾を回収すべし」

練習生は正門を出ると四方へ散った。私はこの時点まで、目の当りに見る消失した家屋の損害に気をとられて、人命に思いが及んでいなかった。

正門を出て左に折れた路上に長さ六十センチメートルの六角形の筒がごろごろ転がっている。いずれも焼夷弾の残骸だ。

昨日までの商店街はすでに焼け落ちて消滅し、ところどころから白い煙がくすぶり余熱が地上に吹き上げていた。焼け野原に足を入れると、先ず崩れた防空壕に目が止まった。そしてそんな防空壕が隣にもその隣にもあった。

どの防空壕も深さが浅く幅が狭く、屋根が貧弱だった。肝心かなめの屋

根について言えば、角材を渡して板を重ね、その上にむしろかござを張り、さらに土を盛って載せた屋根だった。

それらは女の腕一つが掘ったものか、母親と子どもが掘ったものか、はたまた老夫婦だけの手で掘ったものか、いずれかであろう。とにかく全部が潰れ落ちていて口を空に向けている。

覗くと、大人二人と子ども三人の、焦げて黒くなった死体が、纏っていたはずの衣服は燃えてすでになく裸の状態で重なりあって伏せている。大人一人と子ども二人の黒焦げ死体もある。また別の防空壕では大人一人と子ども一人の死体もある。いずれも出征兵士の留守家族であろうか。

また裏庭から横道に通じる路地に、逃げようとして駆け出したが、煙に巻かれ火に包まれて倒れた、丸太のような死体が転がっている。

不発焼夷弾の回収後、第二回目の命令により、死体に、新しいこもを掛けて回ったが、死体はこれだけではなかった。

当時の教育に染まっていた私は、このような死体を直視していたのだろうか。今では正視できないで逃げ出すところだろう。

思わず顔を背けてしまうような悲惨な焼死体のある小さい防空壕の光景と、多くの焼死体を見たその夜、不気味な夜陰を感じながら不審番の立哨についた自分の姿とが今も目に浮ぶ。

尊い無数の人命を一夜の空襲は奪った。武器を持たない老人も子どもも。

昭和十九年五月十九日の浜松の街角にあった戦争の犠牲者の様子をありのまま綴ることによって、後世の人たちへ、戦争の恐ろしさを少しでも伝えたかったと、終わりに臨み書き添えると同時に、戦争犠牲者参百数十萬の英霊の冥福を祈る。

終わり

平成元年九月十二日